

健康文化

口の中のランドマーク

高田 健三

それは昨年の夏の始め頃であった。それまで数ヶ月間、どうしようかと悩み続けて来たことに区切りを付ける決心がついたのである。と言うと、如何にも大袈裟のようであるが、42年ぶりに歯科医院に行くことを決めたときの、偽らざる心境なのであった。私の心の中には、歯科医院について、辛い悔恨の記憶が残っていて、それが未だに私を歯科嫌いにさせているからである。

小学校に入学した年のことである。門歯の永久歯が生え始めたことでトラブルが起こった。学校の定期健康診断の時、普通は永久歯が乳歯を押し出すようにして生えてくるのが、私の場合はどうした事か、乳歯が抜け落ちない前に永久歯が生えてきたため、歯茎を破って外側に生えそうになっていることが分かった。早速に治療を受けなければならないと云うことで、母親に連れられて歯科医院に行った。改めて診察の結果、残っている乳歯をすぐ抜かないと、第一門歯が二本、鬼の牙のように外向きに生えて来ると云う。子供心にそれは大変だと思ったに違いない。私は神妙に治療用の椅子に座った。

いざ抜歯が始まると、子供なりに覚悟していたとは言え、思っていたより遙かに痛いというか、上顎に掛かるある種の衝撃、口の中に広がる血の臭いに、私は動転してしまった。先生が二本目の抜歯に掛かろうとした時、私は嫌だと言って先生の手をはね除けるなどして突然暴れだしたのである。しかし二本目を抜かないと治療が完了しないので、先生はあの手この手を使って宥め賺かそうとするが、私は椅子に座ったまま反抗を続けた。その時、先生を振り払った私の腕が勢い余って、椅子の傍らに立ててあるスタンドに当たってしまった。アッと云う看護師さんの声と同時に、スタンドは大きな音を立てて床に倒れた。その瞬間は、いったい何が起こったのか私には分からなかった。

私の記憶では当時、患者の座る椅子の横には、フロアスタンドのような棒が立ててあって、それに金属製のトレイが上下にずらして何段も留めてあった。それぞれのトレイには色々な薬の入ったガラス壺、ピンセットなどの処置用の器具、ガーゼ等その他の医療用の材料が分別して乗せてあった。それが倒れたのであるから、その音たるや大きいと云うか、何というか、金属性の器具がぶ

つかり合う甲高いヒステリックな音、ガラスびんが砕け散る硬質な音等が混じり合い、おもちゃ箱をひっくり返したとでも云うような“賑やか”な振動音が診療室中に充満した。

一瞬の静寂の後、先生が怒り出した。“こんな子はもううちでは治療できない”と怒鳴るような声を聞いたような気がする。あまりの光景に母はただ呆然と立っていたように思う。事の次第が分かるに分秒も掛からなかった。私は急に怖くなり、椅子の上に小さく固まって居たことまでは覚えているが、ところがその後どうなったか不思議に記憶に残っていない。精神的に大きなショックを受けると、その時の記憶が消えて残らないこともあると云うが、どうやらそれらしい。あれだけの“破壊”をしたのだから、後片付けもさることながら、先生との対応、それ相応の弁償などをしたのであろうが、母の存命中にそんな話を一度も聞いたことは無かった。私は悔恨の気持ちから、あの時の母の心情に触れたくなくて、ずっと訊くのを躊躇って来た。母は後始末のことなど聞かせて、私が益々歯医者嫌いになってはと慮ったのであろうか。そうであったとしても私の歯医者嫌いは変わらなかったと思う。その後、何処の歯科医院にも行った覚えはない。その証拠に、右の第一門歯は八重歯となって今も厳然と存在しているのである。

その“騒動”から二十八年後、細胞生物学の研究のため、カリフォルニア大学（バークレイ）に行くことになった。その頃、左下顎の第一大臼歯が時々傷む事があった。海外での歯科治療などとても無いと思い、意を決して歯科医院の門をくぐった。小学生の時の騒動以来のことである。診察した先生は、虫歯が大分進んでいるので、長期在外生活のことを考慮すると、抜歯して人工歯を植えた方が良いという。抜歯と聞いたとたん、二十八年前の記憶が甦り思わず怯んだ。抜歯せずに虫歯の治療で済まないかと頼んだが、先生は賛成では無かった。抜歯後一ヶ月ほどしての検診で、歯肉の再生が予想に反して不十分なので、人工歯の植え込みは今回は間に合わない。帰国されてからにしましょうと云う。私のスケジュールを訊いた上での治療手順であった筈だと思うと、釈然としない気持ちが強かったがどうしようもない。このことは私の歯科嫌いを更に増幅する結果となった。

歯のことは帰国後の忙しさの中に埋没したままになって、それから四十二年たった現在も、左の第一大臼歯の“跡地”は依然として“空地”のままである。つまり、私はこの四十二年間、一度も歯科の世話になっていないことになる。歯の健康には無頓着な方なのに、歯を患ったことがないのは自分にも不思議に思っていた。

ところが去年の初め頃から、歯磨きをすると、すすぎ水に時々血が混じることになり気がついてきた。冷たいものを食べると、歯が滲みる。しかし歯のことは私にとって“鬼門”なので、努めて気にしないようにしていたが、そうしているうちに歯茎の裏側が腫れたり、下顎の門歯の付け根の辺りが、外から押さえると鈍痛を感じずるようになった。もしかすると既に、下顎の骨までが侵されていると云うような妄想がちらつくようになってきた。我慢も限界に近づき、意を決して家内に話すと、直ぐに歯科に行きなさいと云う。これは大変なことになりそうと思ったら、七十年前の歯科医院の情景が目に浮かんだ。やはりあの時は、子供にとって我慢を越える怖さがあったのであろう。

家内と娘と孫娘の“三代”がお世話になっている歯科医院は、家内の二十数年前からの掛かり付けなので、彼女らには信用度が高い。新しい治療法も研究し、インフォームド・コンセントにも十分気を遣っているから、治療の内容も分かりやすいと勧める。私の子供の頃の“騒動”は母から聞き知っていて、今はやたらと歯を抜いたりしいなどと、歯の治療歴保持者の大先輩らしくそれとなく気を遣ったりする。幸い我が家から近いと云うこともあって、背中を押されるようにしての大決心となったわけである。

予約した時刻に受付に行き、簡単な調書に記入を済ませ待合室で待つことしばし、名前を呼ばれて診療室にはいると、院長先生が待っていて、“や一、遂に御大が現れましたね”と言う。てぐすね引いて待ってましたとばかりの顔つきであった。と言うのも、今まで家内や娘が治療を受けている時の話の中で、X線の使い方が少し無造作に思える等と私が云っていたことを、娘がそのまま先生に話したらしい。当然先生はムツとしたに違いなく、お父さんは何をしている人ですかと聞かれたという。先刻記入した初診者用調書で、私がその人間であることを先生は知った筈である。ずいぶん前のことであるが、あそこの“親父”は小うるさい人間であることを思い出しているに違いない。ここに来て私が今、どんな立場にいるかを悟ったが、最早、逃げ出す訳にはいかない。

家のものがお世話になっていますと丁寧に挨拶をして、神妙に診療椅子に座った。気がつくと、今の椅子は水平近くまで後ろに倒れるので、患者は殆ど無抵抗の姿勢に近い状態になる。正に“まな板の魚”と言ったところである。その時、又もや七十年前のことが心に浮かんだ。あの時こういう椅子であったら、あの“騒動”は起きなかつたらうにと思ったことである。

先生はしばし口の中を視診した後、虫歯と言うほどのものはないが歯茎に沿ってエナメル質が相当に傷んでいるので、じっくりと処置して行きましようと言った。歯ブラシすると血が出るのは歯周病の所為であって、抜歯しなければな

らないものはない。私が長年気にしていた問題の八重歯の第一門歯も、このままに置きましようと言う事になった。ふーっと息の漏れる思いであった。それより、七十歳代後半で永久歯が全部（但し一本欠）揃っているのは、大変に結構ですと云われた。歯科医師会では八十歳で永久歯二十本を口腔衛生の目標にしていると聞き、この分だと私も歯の健康優良高齢者に選ばれるかもと思ったが、先生によると、最近はそう言う人が予想より増えたので、表彰制度は廃止されたという。“歯の健康優良児”というのがあったと思うが、“歯の健康優良高齢者”の表彰制度は高齢者の努力目標のために復活すべきではなかろうかと思ったりするなど、滑り出しは上々であった。

七月末から始まった治療処置は、一度は口中が血まみれになって肝を潰したこともあったが、まずは順調に進み、口の中の衛生状態は数年来味わったことがないほどの清々しさを取り戻した。こんな事だったらもっと早く診てもらべきだったと反省もしていた十一月末のある日、一通りの処置は済んだので、問題の欠損している第一大臼歯を入れましよう先生が切り出した。私も長年気になっていたことなので、当然のことと思ひ早速に同意した。ところが先生は、インフォームド・コンセントとしての説明の中で、手順としてまず、歯肉深く隠れている“親不知”（第三大臼歯）を抜かなければならないが、この手術は局所に可成りの負荷が掛かるので、術後暫くはその周辺が腫れたり痛んだりすると云う。遂にわたしが恐れていたことが来たなと思ったら、又急に気分が悪くなった。急ぐことではないので考えさせて貰うことになった。

家に帰ってこの話をすると、まず家内が反対した。今まで四十二年間、一本足りないままで胃腸も丈夫で大病もせずに過ごしてきたのに、その歳になって痛いリスクを冒してまで、今以上歯を増やすことはないでしょうと云う。娘に到っては自分の経験から、親不知の抜歯そのものも大変だし、術後数日間の痛みは並ではなく、病騒動のお父さんには耐えられないだろうと脅す始末である。しかし予期せぬ“助言”に内心ホッとして、次の診療日に出かける足取は気分的に軽かった。それでも緊張して、手術はかようしかじかの理由で辞退したいと話すと、先生は一寸間をおいた後、私の事情を分ると云ってくれた。この瞬間、七十年前に端を発する歯のトラブルから、一挙に解放される思いがした。そして“八重歯”と第一大臼歯の“跡地”は、私の“歯歴”に時代を画す“ランドマーク”として、終生口の中に残ることになったのである。（平成十五年、一月）

（名古屋大学名誉教授）